

東北大学

数理・データ科学・AI (AIMD) リテラシ
教育プログラム自己点検・評価書

令和 7 年 11 月

学務審議会データリテラシ共通教育基盤運営委員会

1. 自己点検・評価の実施

東北大学の AIMD (AI, Math. & Data science) リテラシ教育については、全学教育の計画及び実施、履修、試験及び単位に関する事項全般を所掌する学務審議会の下に、データリテラシ共通教育基盤運営委員会を設置し(令和元年2月)、関連する科目委員会（情報教育委員会、数学委員会）等とも調整を図りつつ、企画、運営、評価および改善を進めてきた。加えて、令和元年9月に大学全体の AIMD 教育を推進する部局としてデータ駆動科学・AI 教育研究センターが設置され、大学院情報科学研究科および未踏スケールデータアナリティクスセンター等の関係部局の協力のもと、階層的な AIMD 人材育成体制を構築してきた。

こうした体制のもと、令和2年度から文理を問わず新入生全員に対して AIMD リテラシ教育が開始されたことを受け、各年度の取り組み状況について、データリテラシ共通教育基盤運営委員会が自己点検・評価を行っている。

本学の全学教育における AIMD 教育は、令和3年8月に文部科学省数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度のリテラシーレベルに認定、かつ、同プラスに選定されており（期間・選定の期限：令和8年3月31日）、令和4年8月から、挑創カレッジコンピュテーショナル・データサイエンスプログラムが同認定制度の応用基礎レベルにも認定、かつ、同プラスとしても選定されている（認定・選定の期限：令和9年3月31日）。そのため、本自己点検・評価は、同認定制度において要件とされている点検活動を兼ねた内容となっている。

なお、外部有識者の意見も踏まえ、学外からの視点での点検・評価を実施すべく、数理・データ科学・AI 教育アドバイザリボードが設けられており、令和6年度については、令和7年3月14日に会合を持った。その議事録は、別途、ウェブサイト (<https://aimd.cds.tohoku.ac.jp/ai-math-data-science>) で公開予定である。

2. 自己点検・評価の方法

令和6年度中に全学教育科目として開講された AIMD 関連科目および挑創カレッジ・コンピュテーションナル・データサイエンス (CDS) プログラムの科目群全般を対象とし、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度(MDASH-Literacy および MDASH-Advanced Literacy) で示されている教育の質保証に関わる点検項目、および、本学が目指す AIMD リテラシ教育についてのいくつかの観点に沿って自己点検・評価を行った。

評価結果は、

- 1) 【優】優れた点が認められ、十分な取り組みが成されている

- 2) 【可】概ね必要な取り組みが成されている
 - 3) 【要改善】不十分な点があり、改善の余地が大きい
- の三段階で判定を行った。

3. 点検・評価結果

(1) 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度(MDASH-Literacy および MDASH-Advanced Literacy) で求められている観点

点検項目	点検結果	評価結果
プログラムの履修・修得状況を適切に把握し、プログラムの改善に繋げることができる体制や仕組みが取られているか。	<p>数理・データ科学・AI 関連の科目の履修状況については、教育・学生支援部教務課が学務情報システムを通じて随時データを確認の上、学務審議会データリテラシ共通教育基盤運営委員会、および挑創カレッジ運営委員会に都度報告し、分析と対応を行っている。</p> <p>加えて、全学的な LMS である ISTU/DC、それと連携する動画配信環境 (Panopto)、令和 5 年度より提供されている学習状況可視化サービス (LARS) 等により学習ログの蓄積と利用が可能な状況である。</p>	<p>履修と単位の取得状況を電子的に集計し、それを担当委員会にフィードバックする体制が取られており、点検項目の要件は十分に満たされていると評価できる。</p> <p>判定：【優】</p>
学生の学修成果を的確に把握し、プログラムの改善に結びつけることができる体制や仕組みが取られているか。	<p>数理・データ科学・AI 関連の科目には担当の科目委員会が割り当られており、PDCA サイクルを通じた科目の改善活動が実施されている。その一環として、それぞれの授業での成績分布データが学生の授業評価と共に委員会内で共有・分析されている。</p> <p>全学 LMS と連携する学習活動可視化ツール (LARS) によって学生のアクティビティがモニターできる他、意欲的な学生に対しては民間の AI 資格検定に向けた学修支援を実施し、「腕試し」の機会を提供すると共に、合格状況につい</p>	<p>全学教育を所掌する学務審議会の PDCA サイクルの取り組みの一環として、恒常的な改善への取り組みが行われており、また、LMS 上の活動履歴情報も学修成果の把握に利用されている。加えて、民間検定に向けた学修支援による動機づけが図られており、点検項目の要件は十分に満たされている。</p> <p>判定：【優】</p>

	ても把握している。	
学生アンケート等を通じ、データやエビデンスに基づいた学生の内容の理解度の把握が行われているか。	<p>全ての授業について「学生による授業評価」アンケートを実施し、学生自身の取り組み状況、時間外学修時間、教員の説明のわかり易さ、授業の進度、知識や技能の修得の度合い等についてデータを収集している。アンケート中の自由記述欄も含め、その結果を担当の科目委員会で共有・分析し、評価・改善に活用している。</p> <p>加えて、学習活動可視化ツール（LARS）によって教員が個別学生の活動状況を把握する手段が提供されている。</p> <p>また、民間のAI資格認定に向けた支援制度に参加した学生を対象に、学修の状況と受験結果についてアンケートを実施しており、その中で聞かれた意見をデータ駆動科学・AI教育研究センターで分析の上、新しい取り組みに向けた材料としている。</p>	<p>学生による授業評価結果をすべての授業で実施し、担当教員にフィードバックすると共に、科目委員会でも共有し改善の材料とされており、本点検項目の要件は満たされている。</p> <p>令和6年度からは、教務担当者がLMS上の学生の活動状況を確認し、問題のある可能性のある学生を早期に発見できる仕組みも導入されている。</p> <p>判定：【優】</p>
当該プログラムの学生への周知・浸透に努め、その状況について適切にモニタリングできているか。	<p>「情報とデータの基礎」や挑創カレッジCDSプログラムの受講者からの「学生による授業評価」では、科目に対して肯定的な記述が多く、授業が数理・データ科学・AIの学習の動機づけにつながっていることが確認されているが、アンケート内容をそのまま公開することは難しいものの、先輩のこうした学修の様子についてウェブ</p>	<p>ウェブでの情報発信や入学ガイダンス等において、プログラムの重要性について説明しており、本点検項目の要件は概ね満たされている。</p> <p>令和6年度からは工学部の「クロス情報プログラム」が開始され、それに伴いAIMD関連科目の履修者が急増した。こうした専門教育との連携をさらに強めることで、更なるプログラムの浸透をは</p>

	<p>(https://aimd.cds.tohoku.ac.jp) 等で紹介している。</p> <p>また、学務審議会が定期的に実施している学生との懇談会においても、学生から直接的に意見を収集しており、特に、民間検定（「G 検定」や「E 資格」）取得に向けた学修支援が優れた取り組みとして話題にのぼっている。</p>	<p>かる余地がある。</p> <p>判定：【可】</p>
全学的な履修者数、履修率向上に計画的にも取り組み、その達成・進捗状況が把握されているか。	<p>学部新入学者全員に対して AIMD の基礎を教育する体制は令和 2 年度から開始され、100% の学生が履修している状況であるため、年次進行により、令和 5 年度末までに本学の学部学生のほぼ全員が AIMD の基礎を修得した。</p> <p>また、令和 4 年度からの全学教育改革に伴って新しいカリキュラムのもとで全学教育が実施されており、AIMD 関連の科目についても、開講数や時間割、および学部・学科の修了要件の見直し等によって、文系理系を問わず、さらに履修しやすい体制となっており、事実、履修者数も順調に増加している。</p>	<p>AIMD リテラシー教育を新入学者の全員に対して行う体制を令和元年中に準備し、令和 2 年度からほぼ全員が AIMD の基礎科目を履修しており、年次進行により、学部学生のほぼ全員の履修が完了しておらず、入学時ガイダンス等を通じて、その重要性の周知も行っている。</p> <p>加えて、応用基礎レベルの挑創カレッジコンピュテーションナルデータサイエンスプログラムの履修者も順調に増加していることが確認されており、本点検項目の要件は十分に満たされている。</p> <p>判定：【優】</p>
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価を把握し、プログラムの改善に結び付けられているか。	<p>学務審議会および高度教養教育・学生支援機構が中心となり、「東北大学の教育に関する卒業・修了者/雇用者調査」を実施し、学部卒業生の自己評価、および雇用者側からの修了者に対する所見を調査した実績があり、例えば、「数理的に物事を分析する能力」等に</p>	<p>修了者および就職先に対する調査は行われているものの、AIMD 分野に特化した内容ではなく、実施の間隔も不定期的であるため、AIMD 教育の人材育成の効果がより明らかとなるような調査をさらに充実させる必要がある。</p> <p>判定：【可】</p>

	<p>についての評価・分析を行った。調査項目については適宜見直しつつ、同種の調査を今後も継続することによって、AIMD 教育の充実化がどのような変化をもたらすかについて、継続的にデータの収集と分析を行っている。</p>	
産業界や公的セクター等の外部からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見を収集し、改善に役立てているか。	<p>データ駆動科学・AI 教育研究センターに企業の実務経験者を客員教員として迎えると共に、本学と包括連携協定を締結している複数の企業のデータサイエンティストや AI エンジニアおよびマネージメント担当者と、随時ミーティングやヒアリングを実施し、意見や新しい手法についての提言等を求めている。</p> <p>加えて、本学の理事、AIMD を標榜する企業、AIMD 人材活用企業、AIMD ベンチャー企業、地域 AIMD 企業、自治体からの委員によって構成される「AIMD 教育アドバイザリ委員会」が令和 3 年度より活動を開始し、改善に向けての提言を受けている。</p>	<p>企業の実務家の参画、外部有識者によるアドバイザリボードの設置等、外部からの意見を組み入れる体制を構築し、それが実際に機能しており、本点検項目の要件は満たされている。</p> <p>判定：【優】</p>
数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させるための取り組みが成されているか。	<p>AIMD の基礎科目である「情報とデータの基礎」（全員必修）において、産学連携を通じて独自に開発した e ラーニング教材「AIMD for Future (140 分)」を利用し、モデルカリキュラムの内容を、授業時間外学習を通じて学び、振り返ることができる環境を、1 年生全員に提供している。AIMD for</p>	<p>初学者向けの独自の e ラーニングを開発し全員が学ぶ AIMD 科目で使用する他、学生の興味や関心に合わせた補助的な学修の機会も提供されており、本点検項目の要件は十分に満たされている。</p> <p>判定：【優】</p>

	<p>Future は、図解とナラティブな説明を基本としたコンテンツであり、単に知識の修得に留まらず、仮想課題を通して、データ活用にあたっての倫理について、学ぶことができるよう工夫されている。さらに、意欲のある学生に対しては民間の AIMD 資格検定への挑戦を e ラーニングの機会提供により支援している。</p> <p>加えて、課外学習の機会として、「人工知能技術のためのプログラミング入門」(計 8 回)、企業の実務家による連続セミナー(計 2 回)等を令和 5 年度中に実施し、アンケートでは高い評価を得ている。</p>	
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とするための取り組みが成されているか。</p>	<p>学務審議会の下で、AIMD リテラシ教育全体の調整をデータリテラシ共通教育委員会が行い、関係する各科目内容の検討と実施は情報教育委員会および数学委員会によって行われている。それぞれの科目委員会では、授業評価や成績分布などを指標とした PDCA サイクルによって課題の抽出・分析と対応を継続的に実施しており、さらに学期毎に教員会議 (FD) を開催することで、課題の共有と意見の集約を積み重ねている。</p> <p>こうした取組の一環として、情報教育委員会においては、標準的な講義ノートやサンプルデータ・コードを提供したり、すぐれた教</p>	<p>科目委員会および担当教員間でのすぐれた教育実践の共有等を通じて、わかりやすい授業となるよう、組織として取り組んでおり、学生による授業評価も概ね良好であることから、本点検項目の要件は概ね満たされている。</p> <p>判定：【優】</p>

	育実践を担当教員全員で共有するなどの活動を行っている。	
--	-----------------------------	--

(2) 東北大学が目指す AIMD 教育からの観点

点検項目	点検結果	評価結果
総合大学として、分野横断的で学際性を持った教育プログラムとなっているか。	<p>全学教育の AIMD 科目群は全員が履修する「情報とデータの基礎」に限らず、「情報の基礎」、「数学の基礎」、「統計の基礎」の各科目が、全ての学部の学生に対して開講されている。</p> <p>令和 4 年度から開始されている全学教育改革のもとでの新カリキュラムでは、AIMD の基礎科目は先進科目類現代素養科目群として再構成・常設化され、より履修しやすい時間割となっている。</p> <p>また、挑創カレッジ CDS プログラムにおいては「A I をめぐる人間と社会の過去・現在・未来」等の学際性を強く意識した科目が設定されており、学生による授業評価も高い水準にある。</p>	<p>分野を問わず全ての学部学生が応用基礎レベルまで網羅的に履修可能な体制となっており、本点検項目の要件は十分満たされている。 判定：【優】</p>
高度な専門性を持った人材育成に接続できるような内容と構成になっているか。	<p>挑創カレッジ CDS プログラムの科目群は、意欲的な学生がデータ科学や機械学習等の高度なレベルの内容を学ぶ機会を提供している。</p> <p>また、「数学の基礎」「統計の基礎」科目についても、学務審議会数学委員会が主体となって、学部専門教育への接続を意識した内容に調整されている。令和 6 年度からは工学部の「クロス情報プログラム」においても CDS プログラム科目が活用されるようになった。</p>	<p>分野を問わず、AIMD の各科目の履修が可能となっており、さらに CDS プログラムでより高度な内容の学修機会も提供されているため、本点検項目の要件は十分に満たされている。 判定：【優】</p>

	<p>学生に「力だめし」と動機づけの機会を提供するため、民間の AI 資格検定(日本ディープラーニング協会「G 検定」および「E 資格」)に向けての学修支援を令和 4 年度も引き続き実施している。</p>	
研究大学として、研究の一線での活動が、リテラシレベルの教育内容や教材にもフィードバックされているか。	<p>AIMD 科目群は、データ駆動科学・AI 教育研究センターや情報科学研究科等、当該分野の研究者が担当する体制となっている。</p> <p>挑創カレッジ CDS プログラムにおいて新規科目「数理・AI・データ科学－データ生成・活用の現場に立会う－」を開発し、最先端の研究の現場とその課題を学部生が体験する機会を設けている。</p> <p>本学の AIMD 分野の研究者が執筆する教科書シリーズ「探検データサイエンス」を企画し、令和 3 年度から順次刊行されている(6巻が既刊、さらに 10 タイトル以上を予定)。同シリーズは、人文社会系を含む広い分野からの執筆陣を擁している。</p>	<p>各分野の研究者が AIMD リテラシ全学教育に参画する体制がとられている。また、特徴的な科目の開発、教科書シリーズの刊行等の取り組みもあり、本点検項目の要件は満たされている。</p> <p>判定：【優】</p>
留学生の学びにも配慮されたプログラムとなっているか。	<p>国際学士コースにおいて、「情報基礎」はもとより、関連する科目を英語により実施している。</p> <p>また、日本人学生向けにされた教材は、データ駆動科学・AI 教育研究センターが英語版を作成の上、担当教員に提供している。</p>	<p>留学生に対しても日本語のクラスと同様な教育が提供されており、本点検項目の要件は満たされている。</p> <p>ただし、挑創カレッジ CDS プログラムについては日本語のみの開講となっており、留学生対応については、今後、ゲートウェイカレッジの開始等とも併せて検討の余地が</p>

		ある。 判定：【可】
東北大学の AIMD 教育活動を地域や社会に波及させるための取り組みが成されているか。	<p>数理・データサイエンス・AI 教育強化コンソーシアムの拠点校、および東北ブロックの代表校としての活動を通じて、AIMD の普及・展開を進めている。</p> <p>CDS プログラム科目等で使われている教材やデータは「CDS オープンコースウェア」として集約化し、ウェブ上で公開を行っており、数学の基礎、統計・データ科学、プログラミング等についての学習用コンテンツを動画や Google Collaboratory ノートブック等の形式で一般に公開している。</p> <p>また、令和 5 年度には東北大学 MOOC に情報セキュリティの基礎として「暗号学の現在—現代暗号入門」が追加され、令和 6 年度も引き続き公開されている。</p> <p>加えて、文部科学省の DX ハイスクール事業に採択された宮城県内の高等学校と連携協定を提携したり、教育庁との協力についても検討するなど、高大接続の取り組みにも着手した。</p>	<p>東北地区においては、文部科学省数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定（MDASH）に申請した機関の数（比率）については他の地域と遜色無い水準であるものの、数理・データサイエンス・AI 教育拠点コンソーシアムの会員機関数は他地区と比較して低調な状況であり、更なる取り組みの余地が残る。</p> <p>判定：【可】</p>